NEWSLETTER

Physical History No.6

・今回は、「遠隔教育の比較研究」プロジェクトの関係で、遠隔教育調査研究室の研究員をしている林恵さんから、塩飽諸島・本島についてのレポートをお届けします。
・以前、速水融先生が主催されていた「ユーラシアプロジェクト」で塩飽諸島の本島を訪れたことがあります。
・西日本を中心に宗門改帳の所在調査をしていたのですが、本島にも宗門帳があることが分かりました。あまり多くの冊子は残されていないようなので、その後詳しい調査はしていませんでした。

なお、無断転用はお断りします。 村山 聡

Physical History Research Project (PHRP)
Rocky Mountains, Colorado, USA, October 04, 2007

香川県が誇る美しい瀬戸の風景

本島　ー　塩飽勤番所と笠島集落　ー

香川大学教育学部　遠隔教育調査研究室　林　恵

今回は海の歴史がぎっしり詰まった塩飽諸島のひとつ「本島」の見所を、地元香川出身の林が紹介したいと思います。

塩飽諸島は、まわり16キロの本島を中心に、櫃石・岩黒、そして広島、手島など大小28の島々の総称です。「しわく」の名は、古くから島の浜辺で生産された製塩の“塩焼く”、また狭い備讃の瀬戸の潮が大小の島かげにぶつかりあって、複雑に渦巻いて流れる“潮湧く”の転化とも言われています。

塩飽船の動きがはじめて知られるのは『兵庫北関入船納帳』（中央公論美術出版/1981）（注1）です。これは室町時代後期の文安2（1445）年正月から翌3年正月のあいだの兵庫北関の通関記録です。この『兵庫北関入船納帳』によると、文安2（1445）年正月から翌年正月はじめまでのあいだに塩飽船は延べ37回、兵庫津へ入港しており、讃岐国の船としては宇多津船につぐ高い頻度です。積荷の量でみるかぎり500石以上の大型船はなく、積荷のほとんどは塩でした。また、塩飽船のなかには、当時の管領細川勝元が積荷についての関銭免除の特権を認められた過書船もおり、このころすでに塩飽は京兆家の保護下にあったとみられます。

塩飽水軍の名は、織田・豊臣時代を経て徳川三百年へと受け継がれますが、信長の石山本願寺攻めに味方して、堺港へ出入りする特権を得た塩飽衆は、秀吉の島津攻め、北条攻め、朝鮮出兵において、海上輸送などの役目を負担しました。その功労としてこれらにたずさわった650人に対し、塩飽の島に1250石の領地が与えられ、「人名（にんみょう）」と称したのです。このため塩飽諸島のことをよく「人名の島」ということもあります。以降、塩飽諸島は650人の船方衆から選ばれた4人の年寄たちによって、交代で政治が行われるという独特の島中政治が行われます。本島の内陸部に入ると、大きな位牌型の墓がいくつか見られますが、これは代々年寄を務めた入江家、宮本家の墓です。年寄の富と権力を物語る大きな供養塔です。

<塩飽勤番所>

宮本家の墓から、さらに東へ5分ほど歩くと左手に重厚な構えの長屋門が見えてきます。国の史跡に指定されている「塩飽勤番所」です。（注2）

四方4メートルの土塀に囲まれた勤番所は、寛政10（1798）年の建築で、門の正面に本館があり、左手奥まったところに御朱印蔵があります。本館は、650人の船方を束ねた4人の年寄たちが交代で政務を執った場所であり、朱印蔵には、信長・秀吉・家康から与えられた朱印状や海路図をはじめ、重要書類が大切に保管されたところです。本島を訪れた際には、ぜひ足を運んでみてもらいたい場所の一つです。

写真1：塩飽勤番所（http://www.geocities.jp/simah017/より）

<笠島集落>

国の「伝統的建造物群保存地区」の選定を受けている、笠島の集落は、本島北東の沿岸沿いにあります。北にひらけた海に沿って、本瓦葺きに漆喰塗りの白壁や、なまこ壁に千本格子の窓をあしらった町並みがひしめき、どっしりとしたたたずま

いがとても美しいところです。江戸時代、塩飽の船持ち衆が、その富と誇りを競い合って、屋敷に意匠を凝らしたのです。（注3）

写真2：笠島の町並み（http://www.geocities.jp/simah020/2005/より）

この笠島地区には、現在、江戸時代の建物が13棟、明治時代のものが20棟ほど残っています。その中で国の選定を受け、しかも屋敷や部屋の見学が許されるのは真木（さなぎ）氏宅と小栗氏宅、藤井氏宅の3軒です。なかでも、藤井家は江戸時代に長く島役人を務めた家で、旧宅をそのまま「文書館」として自家に所蔵する古文書等を展示しています。展示品の中には、宗門改帳も見られます。（注4）

瀬戸内海に浮かぶ小さな島「本島」には、豊かな自然と古い建造物、町並みが今なお残っています。他にもいろいろ紹介したいところがたくさんあるのですが、また次回、何かの折にご案内できればと思います。

香川県といえば、「こんぴらさん」と「さぬきうどん」と思いうかべる方が多いでしょうが、2度目の来県の機会には、ぜひこの瀬戸の小島に足を運んでみてください。

写真3：文書館「藤井家」（http://www.geocities.jp/simah020/2005/fujii.htmlより）

〔注釈〕

注1：『兵庫北関入船納帳』から知られる讃岐国の港の配置と船の動きについては、橋詰茂氏の「『兵庫北関入船納帳』に見る讃岐船の動向」（『香川史学』13号）にくわしい。

注2：「塩飽勤番所」を見学する時は、以下にご注意を。

開館時間9:00～16:00　休館日/月曜日・12/29～1/3　但し、月曜日が休日のときは、その後の最も近い休日でない日が休館日。　入館料/大人200円・小人100人

注3：笠島まち並保存センター（TEL0877-27-3828）

注4：本島の古文書に詳しい丸亀市立資料館館長の秋山氏によれば、「藤井家の古文書所蔵目録には宗門改帳の記載は見あたらない。しかし、展示物の中に1冊程度あったと思う。」とのこと。

閲覧希望の場合は、まず秋山館長さんまでご一報をくださいとのことです。その後、笠島の管理されている方へご連絡していただけるとの話をうかがっています。（連絡先：丸亀資料館秋山館長　TEL0877-22-5366）

〔引用・参考文献〕

・『香川県の歴史』（木原溥幸ほか著／山川出版社／1997）

・パンフレット『本島』（丸亀市商工観光課・丸亀市観光協会発行）

・『街道の日本史45　讃岐と金比羅道』（木原溥幸・和田仁編／吉川弘文館／2001）

☆もっと「本島」について詳しく知りたいと思ったら、地元本島の方が開設している紹介HP

http://www.geocities.jp/simah004/

がおすすめです。島へのアクセス、船の時刻表なども載っています。

編集後記

JANUARY 18, 2008

このニュースレター第６号は、再び新しい執筆者を迎えることができました。

林恵さんは早稲田大学文学部を卒業され、後に、香川大学大学院教育学研究科修士課程で、非常に興味深い「金比羅の女郎屋」をテーマに修士論文を書かれました。林さんには、科研の仕事を手伝って頂いていると同時に、新たに設けました「遠隔教育調査研究室」の研究員をして頂いています。

彼女の修士論文の一部はすでに公刊されていますが、新たにアレンジでしてPHRPで発行しているワーキングペーパー・シリーズに掲載される予定です。ご期待ください。

連絡先：村山　聡
香川県高松市幸町１-１
香川大学教育学部
tel/fax: 087-832-1571(office)
Email: muras@ed.kagawa-u.ac.jp
Homepage: http://rfweb.ed.kagawa-u.ac.jp/project/wiki/muras/wiki.cgi